飾窓
第一部
雅代と達希
作　飛鳥 世一

目次

■予　告『謹賀新年』版　……　1

■予　告『謹賀新年』版

「……ん、……あ、………あふっ……あ〜〜オイシイのぉ〜……ずっとこうしていられるわ……ンググ……ダメぇ……やめちゃいやぁ……」

「お前はいつもこんなに喋るのか？」

「だってぇ……昂るでしょ……喋りながらすると……アン」そう。確かに喋りながら交わす濃厚なキスほど昂りを艶めかしく彩る刺激はない。達希もそれは知っていた。ただ、はじめて交わす口づけの相手と、言葉を交わしながらキスが出来る女というのは多くは無いことも知っていた。寧ろこれは最後まで「つれてってね」の合図なのだろう。達希は雅代の唇を甘く咬み、舌先で雅代の舌を愛撫しながら濡れそぼった“愛の言葉”を流し込んだ。つい４時間ほど前に神の御前で違う女に誓った舌の根も乾かぬうちに……雅代の咽喉が応えるように嚥下を繰り返す。

「ンふ……んぐ……」と。

「ねぇ……達希……どうして結婚したばかりの男のキスってこんなにアマイの？　わたし、キスだけで見抜ける自信あるワ……あ〜駄目……立っていられなくなっちゃうから……そんなにいじ……あっ……えっ！　……」

「雅代はキスがすきなんだなぁ……」

「キスのないエッチなんか考えられない……　さぁ、もう……戻りましょ〜怪しまれちゃうワ。先に戻ってね〜香織ちゃんのところに」

「お前って女（やつ）はとんでもねぇな（笑）、どうしてくれんだよこれ……」達希はそういうとズボンの中で固く上ずったそれを雅代の秘芯にぐりぐりと押し付けてみせた。

「ンフッ……達希……二次会は長いのよ〜、先に寝落ちしないでね」最後の軽い口づけを交わすと雅代は達希をトイレの個室から送り出した。

■

「ねぇ……　達希ってさ、どうして香織ちゃんと結婚するわけ？」
「……　知らないわよ……ばんかつ先輩なら知ってるんじゃない？」
「そういえば、先輩同士でヒソヒソやっていたものね……、でもさ、達希って日本中に女いたわよね。信じられないほど（笑）、東京のさ、目黒君なんかも言っていたじゃない。達希の手の速さは凄いってさ。大体、その日のうちにヤッチャウラシイって、一時なんか、十二股かけてたらしいわよ。結婚決めたときにも一時六股だったて云ってたから～それを全部一気に清算してさ、なのに……まだ二十四歳でしょ？　それで香織ちゃんと結婚するって……だって達希さ、香織ちゃんの二個上の藤崎正美を狙ってたって聞いたことあるのよね。どうでもいいけどさ、添乗員とは付き合っちゃ駄目よね。まして結婚前提なら絶対だめよ。雅代も気をつけてよ、あんたも惚れっぽいんだから……先に行ってるわね～」
「……うん、すぐに行くわ」
【別にスキだったわけじゃない…と思う……でもなんだろう。ちょっと疼く。達希のような遊び人が結婚を決める理由ってなんなのだろう。まして、普通の相手との結婚じゃない。多分、他の女の子達の方がずっと“まとも”だったはず。なのに達希は香織を選んだ。おかしくない？　　まさか子供でもできた？　それとも、はじめから離婚前提での結婚？　嫌だ、なんでこんなに気になるんだろうわたし……、誘ってみる？　え～っ、何考えてんのよわたし。でもさ、誘ってみたら本気度はわかるかもネ……わたし……好きだった？　達希のこと――したらわかるかも……結婚式挙げたばかりの男とする……ってどんな感じだろう。達希は出来るのかしら、わたしはどっちを望んでる？　出来ない男？　出来ちゃう男？　ちがう～主語が違うのよ。出来ない達希？、出来ちゃう達希。そう疑問はこうあるべきなのよ～　わたし……わたしは出来ちゃうんだろうか……】

つづく

「謹賀新年」

２０２６年新春一本目の短編書き下ろし小説

これがホントの女と男の小説のお話し……

尚、本作は書き下ろし完成後の公開となります。悪しからず。
あの人の愛を疑りたくなきゃ。読まぬことをお勧めします。

小説『飾窓』第一部 雅代と達希

著　者　　飛鳥世一(辻話人〔フール〕)

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社